

て、携えし所の書籍、率^{おほじ}其の略奪焼棄する所となり、纔に身を以て免る。転じて福州に到り、遽に疾に罹り、志業^{しぎふ}竟に是れが為に頓挫す。洵に惜しむ可し」と記している。義和團云々の話は「開業趣意書」に記すところと合わないから、おそらく義和団の後、吾妻はなんらかの事故に遭い病気になるって帰国したのだろう。そして「君は帰朝後、宿病纏綿^{まこと}癒えず。之に加えて債鬼日に門を覗い、復た如何ともす可からず」と記すのみだから、善隣訳書館の事業が挫折しただけでなく、その後の吾妻の生活はたいへんに窮迫したものだっ
たらしい。

善隣訳書館は失敗した。しかしながら、日本の文明的達成を近隣諸国に提供しようとのこの計画は、まさに善隣訳書館の名に背かぬものであったし、対等の関係を前提に自分たちの「営利的事業」を「国家的事業」の射程でとらえて実践しようとしたこの試みは注目すべきものであった。それがのちに埋もれてしまったのは、おそらく日本のその後の歩みと関わることであろうが、善隣訳書館のもった歴史的意義は十分に認められてよいだろう。

注

- (1) 『株式会社 善隣訳書館 株式組織ト為スノ理由ノ目論見書ノ営業設計ノ営業説明』即「韋庵先生目録：二六五番」内文書所掲「善隣訳書館開業趣意書」一頁。以下、「開業趣意書」と略す。
- (2) 『大日本維新史』線装二冊、本文九十四葉。「明治三十二年己亥十二月 文学博士重野安釋謹撰」。
- (3) 『国家学』線装二冊、本文百四十五葉。「明治三十有二年六月 善隣訳書館幹事吾妻兵治識」。
- (4) 『戦法学』線装一冊、本文三十八葉。中村義「白岩龍平日記 アジア主義実業家の生涯」研文出版、一九九九年、三百四十八頁。
- (5) 『記日本創設善隣訳書館事系之以論』『申報』一九〇〇年一月十日。
- (6) 『善隣有道』『申報』一九〇〇年一月八日。
- (7) 王仁乾、第四書翰『汪康年師友書札』第一卷、上海古籍出版社、一九八六年、四十三頁。
- (8) 王仁乾、第八書翰『汪康年師友書札』第一卷、四十九頁。
- (9) 『明治人名辞典』上巻、日本図書センター、一九八七年（底本：古林龜治郎編『現代人名辞典』中央通信社、一九二二年）。
- (10) 宮内黙蔵（鹿川老漁）『吾妻醒軒君行略』

終章

初期アジア主義の歴史的意義

— 東亜同文会の成立をめぐって —

アジア主義という言葉に包まれる内容にはきわめて広いものがあり、その語は時代によってさまざまな意味合いで使われてきた。とりわけ十五年戦争期に侵略を覆いかくす形で大アジア主義が高唱され、さらに大東亜共栄圏として抑圧構造を物質化した統治実体が出現したため、戦後にはアジア主義そのものが胡散臭さをともなって敬遠されることになった。

本稿は、見られるとおり、興亜会から善隣訳書館にいたるまでの初期アジア主義史を点描的に取りあげたものである。それらはみな「興亜」をその組織結成の趣旨ないし目標としてもつ団体なのであるが、アジアと言っても、その中心にはいずれも中国がおかれていた。やがてそのような時代背景をふまえて、

中期のアジア主義史でもっとも重要な役割を演じた東亜同文会の登場を見ることになる。東亜会と同文会が合併して東亜同文会が発足したのは、一八九八年十一月二日のことである。その「主意書」⁽¹⁾では、日清戦争を兄弟牆に關ぐの鵲蚌^{いづはう}の争いだったとして、今後の両国のあるべき関係を以下のように描き出している。

此時に當りて、上は即ち兩國政府須らく公を執り礼を尚び、益々邦交を固ふすべく、下は則ち兩國商民須く信を守り利を共にし、弥々隣誼を善くすべく、兩國士大夫則ち中流の砥柱^{しちちう}となり、須らく相交るに誠を以てし、大道を講明し以て上を助け上を律し、同じく盛強を底すべきなり。是れ我が東亜同文会を設くる所以なり。

（漢文）『英漢和対訳 泰西格言集』敬文館、一九二二年、四一六頁。以下、この「行略」によるものは、基本的に注記を略す。

- (12) 『日本近代文学大辞典』第五卷、講談社、一九七七年、二百八十八頁。
- (13) 「読西史」（漢文）『同人社文学雑誌』明治九年七月。『泰西格言集』付録による。
- (14) 「行略」五頁。
- (15) 吾妻兵治「善隣訳書館条議引」『亜東時報』第二十一号、一九〇〇年四月二十八日。
- (16) 前号六十八頁下段所引の一文ときわめてよく似たものであることは、一見して明らかだろうが、その改訂版である『清議報』第二号所載の「善隣協会主旨」とは、ほとんど同じである。
- (17) 「開業趣意書」二頁。
- (18) 「開業趣意書」五頁、十四頁。
- (19) さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版、一九六〇年、付表一。
- (20) 「開業趣意書」三頁、四頁。
- (21) 「開業趣意書」十一頁。
- (22) 「開業趣意書」十一頁。
- (23) 「開業趣意書」十二頁。
- (24) この「営業説明」には四種の書籍以外に、「吾館の英華字典の如き、大版巻千三百餘頁のもの」への言及があるが、この字典については未詳である。

一八九八年といえば、国際的には清国が列強の勢力範囲分割合戦の焦点となり、その清国では戊戌の変法という破天荒な事態がまきおこった年である。ついで西太后による政変がおこって皇帝が幽閉されることになった。隣国でのこの大激動は、日本でも朝野の関心をつよく引いていた。

政変後、お尋ね者となり日本に亡命することになった康有为や梁啓超が、東亜会員の宮崎滔天や平山周にともなわれて東京に到着したのは、東亜同文会の創立にさきだつこと、わずかに一週間から十日ばかり前のことであった。すでに、清朝打倒の革命を唱える孫文らが日本を根拠地に活動していたのにくわえて、日本政府はあらたにもう一つの外交問題を抱えることになったわけである。もちろん、皇帝を擁して紫禁城の内部で実際に変法を行った康・梁の政治的重要性は、孫文とは比較にならないほど大きなものであった。

東亜同文会も、なによりもまず、「善くすべき隣誼」を尽くす相手を決めなければならなかった。つまり政治亡命してきたお尋ね者の康有为・梁啓超らにたいしていかなる態度をとるのか、というこの難問に初発から直面したわけである。政治亡命者として扱かえば

北京政府の意向には沿えず、対清政策になんらかの支障をきたす。政治亡命者として扱わなければ、万国公法を遵守せぬものとして国際的に不興を蒙ることになるが、条約改正のためには、それは避けねばならない。会内の意見には、康・梁らの改革を支持しようとするものもあれば、中央政府との関係を重視するものもあった。康・梁らの改革支援を主目標にかかげた東亜会と、大陸での事業経営などの活動をふまえて発足した同文会が一つになったのだから、そうなるが当然だったのである。

発会のさいになされた「決議」では、その問題をめぐっての政治的態度を以下の四項目にまとめ、こう規定している⁽²⁾。

支那を保全す

支那の改善を助成す

支那の時事を討究し実行を期す

国論を喚起す

ここに、日本の対華政策にとってきわめて重要な意味をもつ「支那保全」のスローガンが、アジア主義団体の行動綱領の一項として掲げられたのである。それは対立する両派の意見を近衛篤磨がまとめたものとされているのだが、酒田正敏氏によれば、このころ近衛篤磨はすでに「日清同盟論」から「支那保全

論」に移行していた⁽³⁾と、このことから、近衛がまとめたというより、会員が近衛の考えを受け入れたということになるのだろう。

「保全」とは、言うまでもなく「分割」の対語である。当時の東アジアをめぐる国際情勢のなかでは、周知のとおり、この「保全」「分割」が列強の対華政策のキーワードとなっていたのであって、ともに清国の主権を下に見下しての優越的立場からする政策だった。つまり、近衛によって会内の意見を調停するために提起された「支那保全」というスローガンは、会内的には会員の対立する意見を調停するために出されたものであったとしても、国際的には、東亜同文会が日本のアジア主義団体として、清国にたいして優越的立場に立つものであることを表明した、ということであった。

日清戦争における勝利が日本の近代文明受容の結果であるということは、そのころすでに清国でも広く認められていた。したがって、進化史観が当時の時代思潮の主流であったことに鑑みるなら、日本が清国ないし他のアジア諸国にたいして優越的地位を確立したとの認識の存在は、客観的な歴史事象なのであった。したがって、その関係性を会の行動綱領に反映させた東亜同文会が出現したというこ

とは、そのような基盤のうえに日本のアジア主義が新しい段階へと踏み出すにいたったことを示す出来事だったのである。東亜同文会をもってアジア主義史中期の出発点とする所以である⁽⁴⁾。

ここで、これまでに取りあげた諸団体の性格を簡単に振り返ってみよう。

ほとんど実体をもつことなく終わった振亜社はさておき、興亜会（一八八〇年創立）はその「規則」で、「亜細亜諸邦の形勢・事情を講究」することと「言語文章の学を修得」することを掲げ、前文にあたる「設立緒言」では、全洲の志士が聯携して欧米のために衰微させられた「亜細亜全洲の大勢を振興する」ことを唱っていた。そのさい、提携にあたっての対等性の原則は、いわばア priori に前提されていたばかりでなく、漢文中心の東アジアの歴史からすれば自然なことなのだが、北京官話をヨーロッパの英語にあたる共通言語にしようとの提言とそれに沿っての実践まで見られたのである。

興亜会を継いだ亜細亜協会（一八八三年発足）はその「規則」で、アジア諸国が広く「親睦交際」をなし、もって「知識を交換し、學術を研究する等」を目的とする、と記していた。明治十年代にあっては、興亜をいうに

も、まずアジアの諸国についてその実情を知ることから始めようとしたのであって、その目的は協調的な関係のうえにうち立てられた「通商」関係、すなわち「往来」と「貿易」を安定的に発展させようとするにあった。

「私利」の追求が「公利」の実現と表裏をなすもの、と考えられていたのである。

ついで東邦協会（一八九〇年創立）はその「設立趣旨」で、東洋における欧米諸国との均衡をはかるために、「東洋の先進」たる日本帝国が「実力を外部に張」ることを言っているが、しかし主眼はあくまで「東南洋の事物を講究する」ことに置かれていた。しかも、それは未開を開明へと導いてこそ文明の名に恥じぬとする「国家王道の実践」に結びつけて提起されていた。つまり、ここで述べられた日本の先進性を打ちだしての対外進出は、自身の姿勢の表明なのであって、相手の主体性を踏みにじるものではなかったのである。

東亜会や同文会（ともに一八九八年創立）は、前者が国内の大陸への進出をねらう人士を基盤にしていたのたいし、後者は大陸で活動する人々が日本にむけて働きかけるなかで組織されたものだったが、まだ相手国にたいする優越的立場を明示的に提起するにはい

たっていない。日清戦争での戦勝後ゆえ、すでに個々の言説中にはその傾向が現れていたのだから、弓は引き絞られても、矢はまだ発せられていなかったのである。

一方、善隣協会（一八九八年に主旨公表）や善隣訳書館（一八九九年創立）は、日本の優越的関係を踏まえながら、それを対等性の原則のもとに営利事業として展開することを目指したところみであった。西洋近代文明を東アジアの地に訳書を通じて広めることは、「国家的と営利的と互に首尾を為す」ものと認識されていたのであって、そこに日本の優越性が侵略的な国権意識にむすびついたり、相手国にたいする差別や蔑視へとつきすすむ形跡は、すこしも見られない。

くわえてもう一つ、このいわゆる「初期」、明治初年から義和団事件までの時期に日清戦争を境として敗戦国の清国の側でアジア主義的提携への動きがより勢いをもつにいたったことは、とりわけ注意されてよい。中華意識の虚妄をさとした知識人が、明治日本の文明史的達成を学びとろうとしたのである。亜細亜協会や東亜会の支部設立において、両国の関係者の思惑に微妙なくちがいが見られなではないが、少なくとも中国側人士が対等な提携と発展を考えていたことに問題はない

し、日本側の多くの人士もそれに真摯に対応したのであった。

以上に振り返ったところからも見てとれるように、東亜同文会の「支那保全」がアジア主義の歴史において、新しい段階を劃するものであったことは明らかなのである。いま、その劃段階性を、梁啓超の指摘するところによって反照しておこう。

梁は言う。ヨーロッパ人や日本人はよく「支那保全」を口にするが、「わたしは日頃この言葉を聞くほど嫌なことはない。支那が他人に保全してもらわねばならないのなら、きつと保全することはできないし、もし保全できるものなら、他人に保全してもらうまでもないからだ。人を保全すると言うのは、人の自由を侵すと謂うことであり、人が自分を保全してくれるように望むのは、自由を放棄するということである⁽⁵⁾。これは、当時にあった出色の言説であって、自由権との関係において保全論にたいする梁啓超の基本的な認識がここに示されているのである。

ただし、これは「自由書」という読書ノートの欄の文章であって、梁啓超の他の論説で保全論が政治的基準から好いものと評価されていることにも、留意しておくべきである。と同時に、優越的立場の認識が必ずしも序列

化された「差別」に結びつくのではなく、差異を踏まえた対等関係の構築へと進むことがあることも、認めておかねばならない。つまり梁啓超は、人間存在の根本に視点を据えての議論と、外交政策のレベルで展開する議論と、ふたつをいわば別々の次元で組み立てていたのである。

話を東亜同文会にもどそう。同じ創立の会で決められた「規則」では、「第一条」に「本会は本部を東京に置き、支部を支那各地に置く」⁽⁷⁾と対華活動を主眼とする組織であることを鮮明にし、以下、会長・幹事、大会、会費等について簡潔に規定しており、その「規則」に従って役員が選考された。やや後に決定された清国派遣員である各地支部の主任⁽⁸⁾とともに、創立時の役員を掲げる。

会長 近衛篤磨
幹事 陸奥 池辺吉太郎 佐藤宏
井上雅二
常任幹事 田鍋安之助
支部主任：北京 中西正樹
上海 井手三郎
漢口 宗方小太郎
福州 中島貞雄
広東 高橋謙
なかなかの顔ぶれであるが、創立当初の会

ややあって一九〇〇年三月、亜細亜協会が東亜同文会に吸収された。「同じく東邦の時事を憂ふものの小異を捨てて大同に従ふの得策なるを慮り、且つは数年前より同協会の沈黙無事に経過するを憾となし、本会と相協力して大に東亜の時局に尽すあらん」としての措置だったという。亜細亜協会から「合併」を申し入れた書面には、榎本武揚・長岡護美・岸田吟香・恒屋盛服の名が記されており、同会が提供した資産は金三千円と書籍・物品若干点だったという。東亜同文会のような大組織ができたからには、老舗ではあったも力量をうしなつた亜細亜協会のような組織が吸収合併されることになるのは、ほとんど必然の数だったわけである⁽⁹⁾。ただし長岡も岸田も、創立当初からの東亜同文会員でもあった。

また、善隣訳書館の代表者であった松本正純が「青年国民同盟会」を代表して国民同盟会の結成に参加したという。国民同盟会とは、九〇〇年九月に近衛篤磨が立ち上げた組織で、「文化的」な対外活動を標榜した東亜同文会にたいし、「政治的」な実践的活動を追求するためのものだったとされる⁽¹⁰⁾。善隣訳書館はこのときすでに活動困難な状態に陥っていたのではないかと思われるから、

員として名前が掲げられているのは計六十人、役員以外で関係深い人士をあげるなら、犬養毅・柏原文太郎・谷干城・長岡護美・福本誠・江藤新作・岸田吟香・宮崎滔天、在ウラジオストックの内田甲、在清国の平山周ら、枚挙に暇がない。なお、翌春の大会で常任幹事を廃して幹事長が設けられ、陸奥がその任に就いた。また、やや遅れて入会した内藤湖南は、第五号から『東亜時論』の編集を担当した。

ところで、一八九八年秋に東亜同文会が誕生したのは、政府の補助金供与がふかく関係していた。関係諸団体の取りまとめを依頼されていた近衛篤磨は十月二十二日⁽¹¹⁾に「熟議の末」、東邦協会・亜細亜協会・同文会・東亜会・海外教育会などを「打て一丸」とすることを決意し、結局、東亜会と同文会を併せて東亜同文会を立ち上げるようになったのである。

その間の事情を政府に活動資金を出すように働きかけた側から言えば、犬養毅の言だが、隈板内閣ができた時（一八九八年六月）「対支政策」確立のために調査などを行う費用として「機密費」から二十万円ばかりを出させようとしたら内閣がつぶれた（同年十一月）ので、次の山県内閣の時、佐々友房・星亨ら

松本が別に活動の場をもとめるのは当然のことだが、善隣訳書館の存在意義そのものである訳書刊行事業に東亜同文会がどう対処しようとしたのかは分からない。

さて、半官半民組織として「支那保全」のスローガンをかかげた東亜同文会が、清国の改革派にたいして採った態度をここで見ておこう。

まず、東亜同文会は当初、康有為・梁啓超一派の亡命にたいし協力的だった。梁啓超を軍艦に搭乗させて移送してきたことに見られるように、政府からして「協力」的だったこともあろうし、東亜会のなりたちからしてもそうあるべきだったのである。しかし、山県内閣の登場とともに、政府・外務省はやがて方針を変え、北京政府の康・梁追放要求を容れて、結局、康有為を「自発」的に離日させることで辻褄を合わせることになる。「自発」的とのポーズをとったのは、言うまでもなく、国際法違反を指弾されること恐れただけであって、その件で重要な役割を演じたのが近衛篤磨であった⁽¹²⁾。

東亜同文会の康・梁支援策の転換を明白に示した文章として、翌新氏は『亜東時報』の深山虎太郎の書翰と『東亜時論』の陸奥の論説をあわせ指摘された⁽¹³⁾。深山の書翰「康有

と組んで、「何処にも当たり障りのないお公家さんの近衛公にやらせよう」ということになって、東亜同文会といふものが出来た」という次第である⁽¹⁴⁾。そのような政治的背景のなかから生み出された東亜同文会は、坂井雄吉氏に拠れば、日清戦争後に輩出した対外関係諸団体を大同団結し、半官半民団体ないし外務省・軍部の外郭団体として、東洋問題にたいする活動を推進しようとした組織、なのであった⁽¹⁵⁾。

補助金は外務省機密費で年に四万円⁽¹⁶⁾、前章でとりあげた善隣訳書館にたいする供与が二千円一回かきりだったのに比べれば、まるで次元のちがう巨額である。それをもとに「半官半民団体ないし外務省・軍部の外郭団体」としてつくられたとすれば、東亜同文会が政府・国策にたいして如何なる態度を採らざるをえない立場に立たされていたかは、問わずして明らかだろう。とはいえ、それが民間の団体としてつくられたのには、やはり政府から相対的に自立した組織の必要性があったからであって、実際に同会は一定の独自性を保持しつつその活動を展開しつつあったのであった。相対的な自立性ゆきにしては、ほとんど半世紀になんなんとする歴史をつづけることは不可能だったにちがいない。

為に与える書⁽¹⁷⁾は外国頼みの改革策が誤りでしかないことを指摘して、日本政府が康・梁の支援を行うことに明確に反対したものである。議論の骨子は康有為の人格に疑問を投げかけることを基礎にして組み立てられており、なかでも西太后にたいする康の悪罵を「読むに忍びず」と批判している。また梁啓超の『清議報』の論が天下を救うに役立たぬ口舌の論にすぎぬと切って棄てているのである。

陸の論説「社交上の日清」⁽¹⁸⁾は、政府間の交際を外交上の日清とするのにたいして、人民間の交際を社交上の日清と規定し、東亜同文会の「主眼とするところは社交上の日清に在り」として、その親密化のためには「支那人上」が「日本語を学ぶこと、日本人に就きて常識を養ふこと、日本人と協同して其の国の思想界に革新を行ふこと」の必要を説いて、日本政府に改革援助を頼むことにたいしては、同・歩調をとらぬことを鮮明にした。やがて幹事長になる陸奥の執筆にかかる論説ゆえ、会の態度を表明する一文だったことは確かである。

ちなみに、翌新氏は王照の回想を引いて、近衛篤磨も当初は「康・梁重視」であったとされる⁽¹⁹⁾が、それは当たるまい。康有為の離

日中関係基本資料集

財団法人霞山会創立
五十周年記念出版

A5判美装箱入付・年表／年表註 一三六〇頁 定価二一、〇〇〇円（税込）

一九四九～一九九七年

▼中華人民共和国の成立
から日中国交正常化二十
五周年まで、激動の日中
関係を詳細な資料と年表
で跡付ける画期的資料集。
▼大学・図書館をはじめ
中国問題にたずさわる専
門家・研究者に必携の書。

財団法人 霞山会

東京都千代田区霞が関3-2-4
☎ 03(3581)0401

日問題や梁啓超の『清議報』への執筆禁止申
しつけなどのようなことは、たしかに十二月
以降のことであるが、それ以前において近衛
が康・梁に好意的に対処した形跡は認められ
ないのである。

近衛篤磨が好意的ではなかったにしても、
東亜同文会が当初、康有為・梁啓超らを支援
したことは確かである。それは康・梁の生
活万般にわたるもので、たとえば梁啓超はそ
の任にあたった柏原文太郎にたいする感謝
を、妻李蕙仙に心をこめて書き送っている。
また、機関誌に關係の文章を発表して輿論の
醸成につとめたのであって、『東亜時論』創
刊号には梁啓超の執筆にかかる光緒帝救援を
要請する書翰、「副島・近衛両公に上まつる
書」が掲載されたのである。さらに、その
政治的背景を日本人に説明するための梁啓超
の「戊戌政変記」の一部が同誌第二号に掲載

され、第四号まではつづけて載せられた。
しかし、そこで中断してしまふのである。
この中断が、康・梁にたいする態度の変更と
かわる措置だったことは、間違いないだろ
う。

さらに言えば、『東亜時論』の編集者は、
「戊戌政変記」を掲載するにあたり、西太后
にたいする「偽臨朝」「妾母」などの悪罵の
辞を伏字^④にしていることにも目をひかれる。
「偽臨朝」とは皇帝を廃立した唐の則天武后
にたいする貶辞であって、西太后がすでに光
緒帝を廃位したと言っていることになるのだ
が、深山虎太郎が康有為を批判した書翰で、
同じ言葉を上げている。また、「副島・近衛
両公に上まつる書」も『東亜時論』に掲載さ
れたものには、同様の伏字処置がとられてい
る。これには、当然に外務省の意向を体す
るという一面があったはずである。

ちなみに、外務省の意向が会の役員人事に
も影を落としていることは、柏原文太郎の幹
事就任問題にも明らかなのである。柏原が創
立の時には役職に任せられず、翌春四月の大
会で幹事になるのだが、会長代理長岡護美の
書翰ではそのことを「最早外務省と感情を害
するの虞なきを以てなり」と説明している。
外務省の感情を害する人物を役員にはしにく
い状況があり、現実にはこのような処置がとら
れていたことが分かる。

このようであったから、東亜同文会は孫文
の革命派にたいする支援にも消極的になった。
宮崎滔天らの活動拠点になっていた広東支部
の解散を清朝政府が要求してきたとき、一九
〇〇年六月、近衛篤磨は幹事会でまず支部長
の高橋謙を召還することにし、さらに七月、
支部廃止を決定したのである。

しかし、近衛が孫文ら革命派と対決しよう

としていたわけではないことは、保全論を批判
した孫文の「支那保全分割合論」^⑤が『東邦
協会会報』に載せられたことから明らかで
ある。近衛が東邦協会副会長であることは先
述したが、両者の關係は孫文編者の「支那現
勢地図」^⑥が同会から刊行されといった間柄
だった。

従来、孫文のこの重要な政論は、中国人留
学生の雑誌『江蘇』に発表されたとされてき
たのだが、実は日本の雑誌、それも「支那保
全論」の首唱者とされる近衛篤磨がふかく関
わるアジア主義団体の機関誌のために書かれ
たものであった。孫文の文章は、自分たちに
たいする援助の提供者としての保全論者を評
価する余地をのこしてはいたが、原則的には
保全論・分割論を合わせて批判するものだっ
た。から、原則的な問題について相手の意見
をもとめ、それに耳を傾けようとする当時の
アジア主義者の度量をそこにみるべきである。
アジア主義の歴史はもっと振り返られてよい
だろう。

注
(1)「東亜同文会主意書」「東亜時論」第一号、
一八九八年十二月、会報欄。下文の「発会
決議」「東亜同文会規則」等、特に注記せ
ぬものは、みなこれに拠る。

- (2) 東亜文化研究所編『東亜同文会史』霞山会、
一九八八年、三十三頁。
- (3) 酒田正敏「近代日本における対外硬運動の
研究」東京大学出版会、一九七八年、百二
十二頁。
- (4) 加々美光行氏は、初期アジア主義を「理想
主義の傾向」「下からアジア世界へつな
がる通路を見ようとする特徴」をもつものと
規定し、近衛篤磨を「初期アジア主義に属
する」とされる。（『東亜同文書院創立者
近衛篤磨の人と思想——初期アジア主義の
系譜』『東亜同文書院大学と愛知大学』第
四集、一九九六年、六十一頁）「初期アジ
ア主義」との概念設定は私と同じだが、そ
の内容はちがっている。
- (5) 梁啓超「保全支那」「清議報」第三十三号、
一八九九年十二月。
- (6) 梁啓超「論今日各国待中国之善法」「清議
報」第五十三、五十五号。
- (7) この「規則」は翌一八九九年四月の春期大
会で、「本会は本部を東京に、支部を内国
及清韓二国に置く」と改められた（『東亜
同文会会則』『東亜時論』第八号、会報欄）。
「東亜」の名に、より相応しい体勢となっ
たわけである。
- (8) 支部主任は、『近衛篤磨日記』第二巻、鹿
島研究所出版会、一九六八年、三百六十三
頁。
- (9) 『近衛篤磨日記』第二巻、百七十五頁。
- (10) 木堂先生伝記刊行会編『犬養木堂伝』中巻、
原書房、一九六八年、七百十五頁。
- (11) 坂井雄吉「近衛篤磨と明治三十年代の対外
硬派——『近衛篤磨日記』によせて」「国家
学会雑誌」第八十三巻第三・四号、七十二
頁。西本願寺の大陸布教師森井国雄の大阪
朝日新聞島居赫雄あて手紙を引く。（『近衛
篤磨日記』第二巻、百十一頁、参照）
- (12) 「甲号：東亜同文会三十二（一八九九）年
度事業費予算書」「近衛篤磨日記」第二巻、
三百六十五頁。ちなみに、中国での事業費
は二万一千九百円で全予算の過半、本部補
助費三千円の七倍が計上されている。上海
『亜東時報』にたいする配分額は七千二百
円、その内、印刷費一千八百円は必要経費
の四分の一の見積もり、とのことである。
- (13) 「東亜同文会と亜細亜協会の合併」「東亜同
文会史」二百八十七頁（『東亜同文会第五
回報告』（会報））。
- (14) 坂井雄吉「近衛篤磨と明治三十年代の対外
硬派」九十四頁。

- (15) 狭間直樹「初到日本の梁啓超」、広東康梁研究会編『戊戌後康梁維新派研究論集』広東人民出版社、一九九四年。
- (16) 翟新『東亜同文会と中国——近代日本における対外理念とその実践——』慶應義塾出版社、二〇〇一年、八十一頁。本書は、東亜同文会研究の一里塚となる労作である。
- (17) 深山虎太郎（山根虎之助）『与康有為書』『東亜時報』第五号、一八九九年一月。しかし、唐才常とは結んでいるのだから、変法派一般ではなく康・梁を批判したのである。
- (18) 陸実『社交上の日清』『東亜時論』第三号、一八九九年一月。
- (19) 翟新『東亜同文会と中国』七十八頁。不遇をかこつ王照からすれば、康・梁は、とにかく陽のあたる存在として、日本人によくされていると映ったのである。
- (20) 『梁啓超年譜長編』上海人民出版社、一九八三年、百六十八頁。
- (21) 梁啓超「上副島近衛両公書」（漢文）『東亜時論』第一号。
- (22) 「政変始末」『東亜時論』第二号、「政変前記」同第三号、「聖徳記」同第四号（一八九九年一月二十五日）。ほかに別題で第一号に載った文章も、のちに「戊戌政変記」に取り入れられているが、第五号以下には、そのような例はない。
- (23) 『東亜時論』上の「戊戌政変記」の伏字は九カ所、その内、八カ所が西太后にたいする罵倒の辞である。
- (24) まったく同じ副島・近衛宛の書翰を『東邦協会会報』第五十三号（一八九八年十二月）が掲載しているが、こちらは発信者梁啓超らの名前を伏せるという政治的対応をしている。二つの会の性格の違いを反映しているのだろう。
- (25) 『近衛篤磨日記』第二巻、三百六十四頁。四月一日に外遊した近衛宛の報告。柏原が外務省に嫌われたのは、康有為の離日問題で康梁一派に同情しすぎたからと思われる。最後は、近衛に因果を含められてそれに従った（三月十六日）から、「最早……」と言うことになったのだろう。
- (26) 翟新『東亜同文会と中国』百五、百三十三頁。
- (27) 孫文逸仙稿「支那保全分割合論」『東邦協会会報』第八十二号、一九〇一年十二月。
- (28) 「支那現勢地図」発行（一九〇〇年七月）後

の『東邦協会会報』第七十七号所載広告には「支那革命派首領孫文逸仙編著」とある。また、翌年二月刊行の支那調査会訳述『支那現勢論』同会刊、の巻末にも、同じ紹介文の広告が載せられている。

- (29) 狭間直樹「支那保全分割合論」をめぐる若干の問題——孫文来日初期革命活動の一側面——、日本孫文研究会等編『孫文と華僑孫文生誕一三〇周年記念国際学術討論会論文集』汲古書院、一九九九年。同「関于孫文的“支那保全分割合論”」『民国档案』二〇〇一年第四期（増補稿）。

『東亜』誌には、ゆたかなスペースを提供していただき、本稿ではかなりのことを論じることができた。心から感謝する。しかし初期アジア主義にかぎっても、論じ残したことはまだまだ多いし、中期・晩期についてはすべて今後の課題である。

拙文にたいする大方のご批判・ご教示をお願いするとともに、この一文がアジア主義研究の進展にとつての呼び水となること願って、筆を擱くことにする。